「日々の理科」（第 1611 号） 2018（H30）,12,-6

「キツネとの対話（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

北軽井沢では、比較的大型の野生哺乳動物が何種類も見られる。イノシシ、カモシカ、アナグマ、テン、タヌキなどだ。中にはアライグマなど、違法放獣によって増え、農作物や野鳥に被害をもたらす「厄介者」もいる。中でも一番よく見かけるのがキツネだ。

晩秋の北軽井沢。シラカバは完全に散って、カラマツの葉が、「金色の雪」のように舞う、美しい季節だ。私の山荘に通じるこの道も、「キツネの散歩道」になっている。

ここ数か月よく見かける若ギツネ。ヒトをあまり恐れず、自分から寄って来ることが多い。カメラを構えても、こうしてじっと「おすわり」している。

「吾輩はキツネである。名前はまだない」オスかメスかもわからないので、名前のつけようもないのだ。オスなら「コン太」か「コン郎」（ガスカートリッジと同じ名前）だろう。メスだと名前は難しい。

晴れた日の午後、時折私の山荘の庭にやってくる。たぶん「午後のおやつ」を探しているのだろう。

しばらく観察していると、落葉の下を盛んに掘り始めた。これはイノシシがよくする方法で、土にもぐっているミミズや昆虫を探しているのだろう。同じ場所で 10 分以上、粘り強く土を掘っていた。その間ずっと、尻尾を縦にゆっくり振っていた。その仕草が面白かった。